

氏 名 柴田 依子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第 222 号

学位授与の日付 平成25年3月22日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 ポール＝ルイ・クーシューと日本
— その生涯とフランスにおける俳句受容

論文審査委員 主 査 教授 早川 聞多
教授 稲賀 繁美
教授 鈴木 貞美
館長 芳賀 徹 静岡県立美術館
教授 藤原 克巳 東京大学

論文内容の要旨

二〇世紀初頭に「世界周遊」の途次来日し、俳句の魅力と普遍性をフランスへ伝えた先駆者はポール＝ルイ・クーシュー（Paul-Louis Couchoud 1879-1959 精神科医、宗教学者）である。

クーシューによる俳句紹介の功績については二〇世紀前半期以来、W.L.シュワルツを初めとする日米欧の比較文学研究者などが言及してきたにもかかわらず、クーシューの生涯と業績について、西欧における俳句受容について、日本との関わりを視座とした実証研究は、クーシュー没後一次資料が散逸してしまったために進展をみないままであった。来日目的に関して、医学の研究とされ、俳句紹介に関心を寄せたという見方が、長い間通説になっていた。

本論文は、日本との関わりを基軸に、彼の多彩な生涯と業績及び西欧における最初期の俳句受容について解明することを目指し、埋もれた資料を発掘・収集し、数多くの一次資料を確定して「資料編」（別冊）を作成することを通じて、検証した初の基礎研究である。

本論文では、この「資料編」を基に、その生涯を青年期、壮年期、晩年・最晩年の三期に分け、その活動履歴を復元し、ハイカイの「文学史」を考察する。

第一章では、世界周遊の書簡や添付の履歴書、またエコール・ノルマル時代における読書歴によって、一九世紀末のパリにおける青年期の渡日前の経歴と、日本の美術書との出会い、及び世界周遊給費生として来日した経緯とその旅程の実態や日本体験等を詳細に明らかにした。①日本語の予備知識のないクーシューが俳句や和歌を発見するに至る経緯は、滞在先であるフランス国立極東学院研究員、クロード・メートルとの出会いとその論文に負っていること、フランス帰国後の俳句伝播の活動、(a) 最初のフランス・ハイカイ集『水の流れのままに』（1905）の刊行や (b) 俳句仏訳論文「ハイカイー日本の詩的エピグラム」（1906）、また (c) 和歌の仏訳を収載した「日本の文明」（1907）の発表は、日本での異文化体験と研究成果であることを解明し、これらの文献の分析により、②俳句、特に、蕪村受容のありようについて考察を加えた。

第二章では、壮年期にかけての時期、日本再訪に関する医学論文や書簡とくに新資料、アナートル・フランス宛書簡を取り上げ、①日本再訪の足跡、美術、医学、宗教、文学などの事績の究明により、医学研究は日本再訪の時期であること、②また帰国後、日本詩歌の抒情的側面を重視し、上記の (b) (c) の論文を「ハイカイ抒情的エピグラム」、「日本の情趣」と改題し、再録して著書『アジアの賢人と詩人』（1916）を刊行し、その序文には、「ウタ」（和歌）や「ハイカイ」（俳句）がより普遍的な視野から評価されていることを指摘した。

第三章では、クーシュー及びジャン・ポーランやポール・エリュアールなどの書簡によって、①クーシュー著書は、フランスの詩人や作家たちに新しい詩のヴィジョンを啓示し、ハイカイの創作活動を触発したこと、②壮年期に「ハイジン」の集いを主宰していた事実を指摘するとともに、これらを契機として、二〇世紀フランス文学に大きな役割を果たした『新フランス評論（N.R.F.）』誌（1920年9月）への「ハイカイ」アンソロジーの掲載へと発展していった経緯を解明した。

第四章では、周辺へ与えた影響を、特に詩人リルケについて考察した。リルケ所蔵本『ア

ジアの賢人と詩人』(三版 1919)に残されている書き込みをたどることによって、最晩年のフランス語連作詩『薔薇』(1924-1926)の詩篇や、自筆の遺言状(1925)に記されていた墓碑銘の三行詩にも、晩年の詩境にあっても、クーシュエの書から啓示された俳句の特質(蕪村句の受容もみられること)を究明した。リルケの俳句受容は、中期の詩「山」に北斎の影響がみられるが、絵画から詩歌へのジャポニスムの展開過程を解明する上では、クーシュエの書が重要な役割を演じていることを意味づけた。

第五章では、クーシュエを起点として、音楽の分野における受容について、彼の仏訳俳句や和歌に触発されて作曲されたフランス歌曲や器楽曲の楽譜を収集し、モーリス・ドランジュ作曲『七つのハイカイ』(1923)や、和歌を素材としたクロード・デルヴァンクール作曲『露の世』(1924)を取り上げ、①俳句や和歌と近代西洋音楽のはじめての融合による、未知なる芸術の創造のプロセスを考察し、②作曲家ジャック・ピロワによって、俳句を素材とした器楽曲『五つのハイカイ』(1925)が生まれたこと、同楽譜の表紙には俳句の特質が書き写されており、日本の情感やエスプリが音楽の地平に展開されていることを実証した。またデルヴァンクール作曲『露の世』(1924)の、版画風の表紙を付した楽譜資料を用いた再現コンクールを通じて、和歌の秘め持つ日本の感性や優美や精神が音楽の地平へと拡大されたこと、詩歌から音楽へのジャポニスムの展開を究明した。

第六章では、フランス・ハイカイの衰退期における晩年の俳句活動の展開について論じ、①渡仏した高浜虚子との出会いを契機として、虚子への寄せ書きのハイカイ創作、虚子による俳句の「季を諷詠する詩」への共感、さらには②長谷川潔宛の書簡の発見を通じて、四季別俳句の挿絵入り仏訳俳句集「日本の抒情的エピグラム」刊行企画への発展等について考察した。さらに最晩年の俳句との絆の深さについてジュリアン・ヴォカンス宛新出書簡を基軸として検証し、また著書『ギリシアの墓碑について』(1952)に関する墓碑銘の翻訳などを通じて検証した。

終章では、クーシュエの死後の追悼文他をもとに、クーシュエの俳句紹介の特徴や功績、その今日的意義等について、総括的な検討を加えた。

クーシュエの俳句紹介の今日史的意義を要約する。彼は青年期ジャポニスムの洗礼を受けた後、世界周遊給費生として来日し、日本体験を通じて、メートル、チェンバレンの先達の俳句翻訳を介し、特にメートルによる日本詩歌の指導により、フランス語圏で俳句がまだほとんど知られていなかった二〇世紀初頭に、俳句や和歌を日本の文明として感知して翻訳した。帰国後、自らも、友人とフランスの運河放浪の旅にでかけ、仏訳俳句を参考にしつつ、三行のハイカイ形式を初めて試みている。また二度の来日を通じて著書『アジアの賢人と詩人』を刊行して、俳句のもつ詩の普遍性を二〇世紀フランスに提示し、さらに「ハイジン」仲間の集いを主宰して、フランス・ハイカイを伝播させる「座」を結成する役割を果たした。とりわけ『N.R.F.』誌に「ハイカイ」アンソロジー掲載を働きかけ、広くフランス文壇に、俳句のジャポニスム世界を開花させた。詩人リルケや作曲家を含む、複数の芸術ジャンルに文化的刺激を波及させる、大きな影響を与えた。西欧の詩人や芸術家のみならず、虚子たち日本俳壇にも交わり、俳句の世界化への息吹を与えた。クーシュエ自身の内なる精神世界にも、俳句との深い絆を見出すことができる。

以上、本論文は、クーシュエの生涯、その俳句受容の実態を、未発見の一次資料を収集、確定、検証することを通じて復元し、ハイカイの文学史の知られざる側面に照明を与えた。

また従来指摘されることのなかった、医学、宗教などの多方面にわたる足跡にも、あらたな事実を発掘しつつ、彼の著作・訳業や俳句活動が文化交流史上、極めて大きな功績をなすものであったことを解明したものである。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は博士号申請者の半生にわたる学術的努力を集積した、文字通りのライフワークである。対象となるポール＝ルイ・クーシュー Paul-Louis Couchoud(1879-1959)は、フランスの名門たる師範学校を卒業し、日露戦争直前にフランス政府の世界周遊給費生として来日した。後年、精神科医として注目されたが、日本滞在中に詩歌、とりわけ俳諧に開眼し、「haikai」としてフランスに広めた。この功績に申請者は注目する。だが、申請者も協力して邦訳出版された著作『アジアの賢人と詩人』(1916)が近年フランスでも再刊されたことを除けば、その詩集を含む業績の多くは、忘却の彼方に置き去りにされてきた。申請者は何度にもわたる現地調査により、多くの未刊行資料、書簡などを発掘し、それらの一次資料に基づき、この詩人医師にかんする世界最初の伝記的記述を完成した。一般向きの著述としては、すでに『俳句のジャポニスム：クーシューと日仏文化交流』が角川叢書として2010年に刊行されている。今回の博士号申請論文は、市販書籍では割愛されたフランス語、ドイツ語での一次資料とその翻刻を基礎資料として再編集し、その後発見された情報を補完した労作である。先行研究が皆無に等しいなか、実証的な伝記的研究として模範的な達成である。論文内容からみて国際日本専攻での審査に適合するものとして、今回論文審査を受理した。

本論文によって達成された成果を列挙したい。

第一にフランスでのハイカイの受容に先鞭をつけた人物の生涯を復元しえたこと。とりわけスピノザやパスカル研究者でもあったクーシューのアナトール・フランスやクロード・メートル、黒田清輝らとの交友関係の逐一を一次資料によって解明したこと。

第二にジャン・ポーランやポール・エリュアールら一流の詩人たちとの交際から、ハイカイの短詩形が詩的前衛に対して及ぼした感化の一端を丹念に跡付けたこと。

第三に芭蕉にも増して蕪村を重視する一方、古今和歌集の和歌を仏訳したクーシューが、音楽家たちに感化を与え、モーリス・ドラージュやクロード・デルヴァンクールらの歌曲、ジャック・ピロワの「五つのハイカイ」といった作曲に結実した様を跡付け、原詩をすべて特定したこと。申請者はこれら忘れられた楽譜の再発掘に基づき、日仏で複数の学術的音楽会を開催し、そうした文化交流史上の貢献を、本論文に反映させている。

第四に1930年代に欧州を訪れた高浜虚子との交際の実相や、版画家・長谷川潔との競作の計画などを突き止めたこと。

第五に詩人ライナー＝マリア・リルケ晩年のフランス語詩『薔薇』にクーシュー経由のハイカイからの靈感を受けた跡があり、リルケ墓碑銘の三行詩にも日本詩歌への理解が投影されているとの仮説を展開したこと。

このように本論文には具体的な資料発見の面で異論なき成果が縦横に見られる。だがその反面、資料発掘と事実確認への禁欲的な自己限定が、論文の射程を狭めたことも否定できない。具体的には、クーシューの協力者の確定。リルケに感銘を与えた蕪村をクーシュー自身が発見しえた経緯。抒情的エピグラフというクーシューの短詩形定義の背後に伏在する詩学上の論争。フランスでは理解されないと虚子が嘆いた季語への、クーシューの例外的な理解の理由とその影響力の評価など。総じて、こうした文化史的な問いや、そこに伏在する西欧の「精神の危機」の解明が期待される。だが申請者が再構成したクーシュー

ひとりの生涯からだけでは、なおフランスでのハイカイ受容の全貌を掴むには至らない。

本論文はこのように将来への課題をしているものの、従来不明のままだった詩人の役割を確定し、かつ文化交渉史解明に資するところは多大である。以上から、審査員は全員一致で、本論文を国際日本研究専攻の学術博士号授与に相応しいものと認定した。